# 「お茶のまち静岡を目指して」

自由民主党静岡市議会議員団・かごしま茶見聞

1、鹿児島県方視察

2、知覧町の茶業にふれる

# 自民党市議団視察報告書

平成１９年５月２２日～２４日

鹿児島県議会にて

目的　　お茶のまち１００年構想を掲げ、静岡ブランドの売込みを行う静岡市のお茶の振興策について、より効果のある政策を考えていきたい。そこで、日本一早い茶産地であり、1 年を通して茶の生産を行い、今や静岡茶の脅威となった鹿児島のお茶に対しての取り組みを学び、良い所は真似しながらもお茶のまち静岡のまちづくりに活用していきたい。（詳しくは視察概要を参照）

２２日（火）鹿児島茶の実態

鹿児島県庁にてかごしま茶の特長（概要）について話を聞く。

鹿児島茶は茶業の生産･流通状況では、栽培面積は減少しているものの面積に対しての生産量は全国一である。ドリンク需要により平成 16,17 年は 10 万トンを維持したが、最近は大手飲料水業者による中国など海外での生産により価格競争と需要が厳しくなっている。特徴として、生産のほとんどは粗茶（あらちゃ）であることが挙げられる。最近の課題としては、輸入量は増加傾向にあったが平成 18 年はポジティブリスト制度（農薬濃度の残数値の調査）の施行により減少。農薬の効果と適正な活用についての説明責任が求められている。栽培

面積は県下では、5年間で１６０ha増加した。（知覧町は減った）流通量の約9割は県外に出荷、しかし「かごしま茶」として消費地問屋での評価に比べ、一般の消費者に対しての知名度不足を解消することが今後の課題である。また、「仕上げ」（消費者へお届けするための加工と包装や宣伝）についての技術力の向上が求められるとのこと。

「かごしま茶」の歴史については、お茶の導入は本格的には戦後。国から受けていた紅茶の生産は５００ｈａであり、国の全体の生産量の半分を鹿児島で作れといわれてやってきたが、日本の紅茶は売れないという転換期から、お茶にシフトを変えた。種子島は最も早く３月下旬から新茶が始まる。本土は４月上旬から始まり、お茶の期間が年間を通して長い。ゆえに、工場の稼働率が高い。最近では頴娃町（えい町）が盛んで１位、知覧町は２位であるが、今年１２月に合併してかごしまのお茶のダントツ１位になる。温暖な鹿児島は早だし方式で南地区が中心。「早出し新茶」で香りの高いお茶を売る。新茶はキロ平均7,500 円だそうだ。それでも安くて困るという。静岡は確か、2,500～3,000 円がいいところだ。やはり、早いと値が高くつく。‥うらやましい。

工場の稼働率、１年を通しての生産（4番茶まであるそうだ。びっくりした。）で平均年収は 700 万円、若者の担い手が多いという。沢山つくるので、畑作生産地帯（平野部）は乗用型摘採機を活用することも特徴である。要するに刈り取り機の使用でお茶の葉を伐る。摘むではない。が、大量生産には適している。しかし、お茶の葉が途中で切れたり、枝も刈り取ってしまい雑な感じがした。「やっぱり、粗茶だな」という感じだ。また、山麓傾斜地帯（北部）では良質なお茶の生産を行っている。

県内では665の粗茶工場があり、現在、規模の拡大（再整備）を行っている。お茶は入札で価格を決定、「ちゃぴおん」という流通センターで取引。携帯端末で入札が可能。開園当時はベルトコンベアーから流れるお茶を見て入札していたが、業者から目が廻るといわれて、人が歩いて置いてあるお茶を品評し、入札するように変わった。１２００店の出店があり、全体の約７０％である。残り３０％は全国で相対取引。課題は先ほどの「仕上げ」で鹿児島は４０軒しかない。静岡は４００軒ある。仕上げ工場への取り組み。

茶の種類は「やぶきた」が４４％で残りは品種の組み合わせ。将来は10,000haの生産を目指す。生産量は25,000 トンから 30,000 トンを目標とする。目標が明確なだけに生産者にとっても良い。すごくうらやましかった。大量生産のお茶の値段については「品質重視」は捨てている。販路拡大対策とリーフティの活用で活性化を目指す。

鹿児島県の茶の実態について（県当局説明）

質問では
Q,乗用トラクターについてA,一戸で平均1.2ｈａ、1工場で12haの規模を基本に整備し、何人かでトラクターを持つ。1法人200haもある。1家で50haもある。大体、2haないと飯が食えないという。5haを目標に考えている。
Q,霜対策や乗用トラクターの購入助成は？A,協同利用でトラクターが 3 分の 1 補助。大体1台当たり800万円。霜ファンは2分の1補助。
Q,工場は個人もちか？A,6割が協同工場になってきた。
その他の問いには、

- それぞれの販路でかごしま茶が売れるように現在、268銘柄ある。
- 後継者については年30名増えている。青年部には300名が加盟している。お茶で生活しているのは4000名いる。
- 海外は農薬に厳しく、ドリンクの輸出は値が下がる一方でこれに対応しなければならないこと。
- 県のお茶の予算は3億円で技術員を12箇所の普及センターに70名派遣していることをやっている。
- 早出しで最近は「ゆたかみどり」２４％で深蒸しの香りが良く、苦味があるのが流行。
- 3番茶4番茶をやって、木は強いのか？やはり、新茶に影響する。

工場現場での質問は、皆が突っ込んで聞いていたので、時間が延びてしまった。

一番の印象は量を作ることにたいして静岡と足並みを合わせられないか？と言う問いに対し、「量をつくらないと海外に対抗できない。伊藤園とも競争ができない。」という言葉だった。彼らは世界でのお茶の販売を考えていることにびっくりしたことと、農家から、競争という言葉を聞き、意識から違うことに愕然とした。

２３日（水）知覧町における茶産業を現地視察

知覧町は遠い。役場でのお茶の無料提供は効果あり。また、このお茶がなかなかおいしかった。静岡市も直ぐやるべし。

残念ながら、2 番茶は明日から始まるそうだ。しかし、お茶を摘む若い家族の姿が車上から眺めることができた。静岡では若い夫婦の茶を摘む姿はあまり見たことがない。

行政の説明は昨日に聞いたとおりなので今日の視察現場の詳細を説明していただき、早速現地を見る。

知覧町は北部の山麓傾斜地帯と南部の畑作生産地帯（乗用トラクター使用）があり、今回は北部の木庄茶団地と有限会社ホクトの製茶工場（粗茶加工施設）、南部の菊永茶生産組合を見学させていただいた。（忙しい時期にありがとうございます）

知覧町役場まえ

乗用トラクター

菊永茶生産組合

有限会社ホクト製茶工場

木庄茶団地にて